

〔資 料〕

## 医療過疎地域に求められる助産ケアに関する文献レビュー

Midwifery care that is indispensable for a medically deprived area

和智 志げみ 永見 桂子

【要 約】 医療過疎地域に求められる助産ケアを明らかにすることをめざして、看護・助産ケアに関する文献レビューを行った。その結果、医療過疎地域における助産ケアとしては、「専門技術者としての存在」「密接な人間関係」が求められていることが推察された。今後の課題としては、医療施設の機能・組織および医療過疎など地域の特性に応じた役割や実践能力についての研究が望まれる。

【Key word】 医療過疎地域、助産ケア、周産期医療、助産師、看護職

### I. 緒 言

近年、周産期医療は産科医の不足による産科施設の相次ぐ閉鎖に伴い、二次医療圏で出産可能な施設がない地域が存在するといった危機的な状況にある。平成18年の医療法の改正により「地域の実情に応じた医療提供・連携」を定めるのは都道府県の責務とされ、医療施設の集約化・重点化、地域病院と診療所との役割分担・連携などが図られつつあるものの、現状は多角的な対策が急務である<sup>1)2)3)</sup>。

A県においても周産期医療を取り巻く現状は厳しい。県内の産科医の激減、勤務医の開業や婦人科への転身などの理由により、医師不足に悩む自治体は分娩施設を集約化する方針を決定し、特に医療過疎地域においては産科病棟の閉鎖・混合化を余儀なくされてきている。そのため、助産師本来の専門性に基づいたケアに専念しにくい状況にある。

平成19年厚生労働省は、「緊急医師確保対策」に関する取り組みを公表し、病院勤務医の過重労働を解消するための勤務環境の整備として、助産師の活用を掲げている。さらに、平成21年「院内助産所や助産師外来の開設促進への新事業」をあげ、院内助産所に関わる医師・助産師への研修などを実施する自治体および、院内助産所や助産師外来を開設する医療機関に補助金を交付することを決め、助産師の業務拡大への期待が高まっている。しかし、平成22年4月の時点での

全国の院内助産所と助産師外来設置数は、院内助産所は59施設、助産師外来405施設であり、産科施設<sup>4)</sup>全体数の院内助産所は約4%、助産師外来は27%と少ない。特に都市部に比べ地方における院内助産所、助産師外来の設置数は少なく、A県においても院内助産所0施設、助産師外来は、平成22年は6施設である<sup>5)</sup>。その背景には助産師のキャリア形成の課題があり<sup>6)</sup>、その状況としては、助産師は卒後3~5年程度<sup>6)7)</sup>を要して一人前となり、助産師外来や院内助産所での活動が可能となることがあげられる。しかし、産科施設においてそのような人材が十分とは言えない状況にある。

現在、日本の助産師基礎教育は4年制大学における教育にシフトし、基礎教育終了後はそれぞれが初心者から熟練者へと成長し、能力、専門性を高めることが期待されている。平成17年に厚生労働省は「新人助産師臨床実践能力向上推進事業」を開始し、卒後1年までの研修指導指針<sup>8)</sup>を提示しているが、2年目以降の助産師の研修指導指針は各施設に委ねられている。

日本助産師会は勤務助産師のケア向上を図るため「施設が妊産婦に示す(サービス)ケア内容」<sup>9)10)11)12)</sup>をまとめ、具体的なケア内容と方法を示しており、日本看護協会は「医療機関における助産ケアの質評価-自己点検のための評価基準-」を作成<sup>13)</sup>し、評価内容として施設の機能評価と助産ケアに関する項目を提示

している。助産師には対象のニーズに応じ、エビデンスに基づいた最良で有効なケアの実践が求められており、周産期医療が危機的な状況の中、医療施設の機能・組織および医療過疎など地域の特性に応じた助産ケアの実践が必要とされている。

そこで、本研究は医療過疎地域に求められる助産ケアを明らかにすることをめざして、看護・助産ケアの文献レビューを行うことを目的とした。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 文献検索過程

医学中央雑誌Web Ver.4をデータベースとし、「医療過疎地域」「へき地医療」「看護」「助産」をキーワードとして原著論文に分類された文献は、193件であった。そのうち「看護」「助産ケア」について記述されている文献33件を対象とした。なお、検索期間は、過去10年間の2001年～2010年とした。

### 2. 分析方法

医療過疎地域に求められる看護ケアについては、要約から看護ケアにあたる箇所を抜粋した。尚、医療過疎地域における看護職の役割はそれぞれの看護職で異なるのではないかと考え、職種別に内容分析した。看護師・保健師・助産師の区別がつかないものは看護職とした。分析結果の妥当性を高めるために母性看護学教員1名のスーパーバイズを受けた。

### 3. 用語の定義

- 1) 医療過疎地域：へき地医療拠点病院を有する地域。
- 2) 助産ケア：助産師が提供する妊産褥婦・新生児期の診断とケア。

## Ⅲ. 結果

### 1. 職種別の年次推移

医療過疎地域における看護に関する193件の文献の年次推移を図1に示した。文献数は2002年から2008年までは増加しているが、近年減少傾向にある。職種別文献数は、看護職が116件（60%）で最も多く、次いで看護師44件（23%）、保健師21件（11%）の順であり、助産師に関する文献12件（6%）と最も少ない結果であった（図2）。

### 2. 文献の概要

33件の文献の概要を表1に示した。ケア提供者ごと

の文献数は、助産師6件、看護師10件、看護職12件、保健師5件であった。

### 3. 医療過疎地域における看護と助産ケアの内容

33文献の看護ケアと助産ケアの内容分析の結果を表2に示した。

#### 1) 看護師

看護師が提供する看護は、「地域のことを熟知している」「幅広い知識と実践能力」「多くの専門職の役割担う」「関連機関との連携」「良い人間関係」の5つのカテゴリーが抽出された。

#### 2) 保健師

保健師が提供する看護は、「関係機関との連携と調整役」「地域住民との連携」「地域全体の把握」「環境や体制づくり」の4つのカテゴリーが抽出された。

#### 3) 看護職

看護職が提供する看護は、「関係機関との連携」「地域の把握」「身近な相談相手」「不安・孤独感の軽減」「緊急時の対応」の5つのカテゴリーが抽出された。

#### 4) 助産師が提供する助産ケア

助産師が提供する助産ケアは、「正常な経過への支援」「専門技術者としての存在」「密接な人間関係」

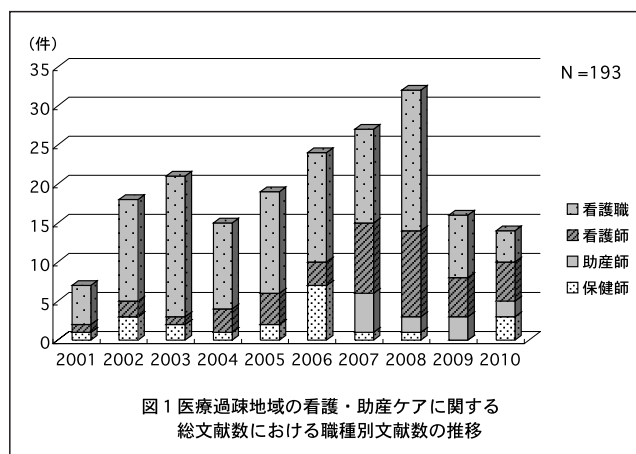


図1 医療過疎地域の看護・助産ケアに関する総文献数における職種別文献数の推移

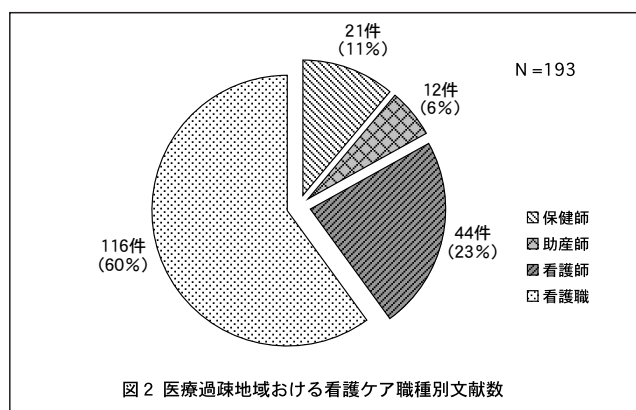


図2 医療過疎地域における看護ケア職種別文献数

表1 文献概要

番号	著者	文献題目	ケア提供者	看護・助産ケアに該当する内容
1	黒田裕子、西岡啓子、加藤優子ほか（2010）	へき地で乳児を育てる母親の育児支援	助産師	育児不安への支援
2	杉山智春、上山直美、岸川重矢（2010）	昭和20年代におけるA島での開業助産師の妊産婦へのかかわり	助産師	正常な経過への支援、心のよりどころを大事にする、妊産婦に寄り添う
3	伊藤由美、木村瑞恵（2009）	遠隔地在住妊婦の分娩に対する不安	助産師	分娩の認識とセルフケアを高める
4	小原 剛、小笠原敏浩、村井眞也ほか（2008）	産婦人科医療過疎地域の岩手県で産婦人科施設集約化は有効か？	助産師	（産道裂傷をつくらない）介助技術のレベルアップ、
5	今田葉子、永見桂子、大平肇子ほか（2008）	医療過疎地域の病院で出産した褥婦の視点からみた周産期における良質なケアの概念	助産師	専門技術提供者としての存在、密接な人間関係、専門職種間の連携と協働
6	大平肇子、今田葉子、永見桂子ほか（2008）	保健師の視点からみた医療過疎地域における母子ケアのための保健師と助産師の連携	助産師	地域と医療施設の事例の情報提供のシステムづくり、地域と医療施設の連携のための組織づくり
7	佐久川政吉、大湾明美（2007）	地域ケアシステム構築における専門職者の役割の検証	看護師	「互助」住民参加の基盤整備（住民組織づくり、情報共有）
8	北山昭雄（2007）	へき地での保健・医療活動における看護職の役割を考える	看護師	I T活用、遠隔看護
9	晋照早苗、田内香織、藤沢まこと（2008）	病院から診療所へ体制移行する過疎地域医療機関における看護援助のありかた	看護師	予防的なかかわり、相談援助、近隣病院と診療所との地域連携
10	大平肇子、小林文子、吉岡多美子ほか（2002）	日本におけるルーラルナーシングの役割モデルについての研究	看護師	地域のことを熟知している、幅広い知識と実践能力を持つ
11	糸数仁美、大湾明美、佐久川政吉ほか（2010）	沖縄の離島ヘリコプターによる救急搬送における看護師の役割	看護師	今後の治療と予後の説明、コミュニケーションの工夫、ヘリ事故時の説明、引き継ぎ方法の検討
12	梅山晴美、宮本サチ子（2009）	離島へ退院する患者調整を行って	看護師	訪問看護、保健所との連携
13	安田貴恵子、御子柴裕子、小林理恵子ほか（2008）	山間地域の診療助所における看護師の役割	看護師	患者との関係を築く努力、安全と安心を考慮した状況判断など
14	晋照早苗、田内香織、森仁 実ほか（2009）	過疎地域における訪問看護師の役割に関する検討	看護師	介護を前向きにできる環境づくり、タイムリーな対応、よい人間関係の継続、自己研鑽を積む、他のサービスを評価する
15	新井信之、渡部幹夫、渡邊喜代子ほか（2006）	離島の精神科障害患者の支援状況	看護師	地域の看護問題の把握、継続的支援
16	吉岡多美子、小林文子、大平肇子ほか（2002）	ルーラルナーシングにおける専門家役割モデルの検証	看護師	保健福祉介護などほかの専門職の役割を担う
17	春山早苗、篠澤侃子、鈴木久美子ほか（2008）	へき地における災害対策体制づくりにかかわる看護職の活動方法に関する研究	看護職	他保健医療福祉関係者との連携、日頃からの住民の援助ニーズの把握、日頃からの連携
18	菊池友美（2008）	島嶼住民の求める離島看護職の役割	看護職	幅広い知識と実践力、地域のことをよく知っている、親身になってくれる、島に長くてくれる、頑張っている
19	成田伸、大原良子、岡本美香ほか（2007）	へき地における成人期にある人々、女性、子供の健康ニーズ	看護職	小児（基礎疾患あり）の緊急時の対応への不安
20	村嶋幸代、田口敦子、永田智子（2006）	ルーラル・リモートエリアにおける訪問看護とそれを支える条件	看護職	地域のケアシステムづくり、他機関との連携や小規模多機能化
21	松浦智和、西基、三宅浩次（2006）	島嶼地域高齢者の主観的健康観とその関連要因	看護職	心配事を聞いてくれる、元気つけてくれる
22	松村尊磨、間瀬教史、鈴木順一ほか（2009）	集落が機能が低下した農村地域高齢者の抑うつおよび将来不安要因とケア・ニーズ	看護職	抑うつ・将来不安軽減が重要
23	北山昭雄（2008）	里山における遠隔看護システムの活用に関する検討	看護職	孤独感・不安感の軽減
24	鈴木久美子（2004）	へき地診療所において発展させるべき看護活動	看護職	地域の把握、関係機関との連携、保健師との協働、身近な相談機関、救急時の対応と病院との連携
25	川崎道子（2003）	離島住民の生活習慣と主観的健康観との関連	看護職	高齢者の健康観を高める
26	大湾明美、佐久川政吉、大川嶺子ほか（2003）	離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究「ふるさと訪問」	看護職	生きがいづくり、家族関係の深まり
27	足立敬子（2003）	中山間地域における保健所の難病患者支援についての検討	看護職	疾患や療養に関する情報提供や患者同士の交流
28	吉浦直美（2003）	離島に住む未熟児の両親への定期的通信便など援助手段の導入 良好な母子関係の成立をめざして	看護職	家族との関係づくり
29	矢島まさえ（2003）	人口過疎地域における精神障害者の社会復帰支援体制の課題	保健師	関係機関との恒常的な連携が急務
30	塩ノ谷朱美、工藤奈織美、鈴木久美子（2010）	集落が散在している山間へき地における介護予防のための市町村保健師か活動に関する研究	保健師	集落内で介護予防に取り組める環境づくり、地域の住民との連携
31	中尾八重子（2008）	訪看護ステーションのない離島における高齢者の療養場所移行の特徴と看護職の役割	保健師	個々の住民と地域全体の把握、今後の予測をもった調整役
32	春山早苗、鈴木久美子、佐藤幸子ほか（2005）	へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割	保健師	健康危機管理の意識を高める、地域住民とともに対応できる体制づくり
33	新井信之、渡部幹夫、渡邊喜代子ほか（2006）	離島に勤務する保健師による活動の方向性	保健師	ニーズを重視した支援、社会支援の充実、資源の有効活用、関係機関との連携



表2 看護・助産ケア内容から抽出されたカテゴリー（職種別）

職 種	抽 出 さ れ た カ テ ゴ リ ー
看 護 師	「地域の援助ニーズの把握」「幅広い知識と実践能力」 「多くの専門職の役割担う」「関連機関との連携」「良い人間関係」
保 健 師	「関係機関との連携と調整役」「地域住民との連携」「地域全体の把握」「環境や体制作り」
看 護 職	「関係機関との連携」「地域の把握」「身近な相談相手」「不安・孤独感の軽減」 「緊急時の対応」
助 産 師	「専門技術者としての存在」「密接な人間関係」「専門職種間の連携と協働」

「専門職種間の連携と協働」の4つのカテゴリーが抽出された。

#### IV. 考 察

文献レビューの結果、医療過疎地域における看護に関する文献は、2002年から2008年まで増加していた。この結果は、2002年に大平ら<sup>56)</sup>により「ルーラルナーシングの役割モデルについての研究」が始まり、2005年には奥野ら<sup>57)</sup>が「ルーラルナーシング」を提唱したことに加え、医療法の改正が影響したと考える。

医療過疎地域における助産ケアに関する文献は6件と少ない結果であった。助産に関わる文献数も14件と職種の中では最も少ない結果であったことから、医療過疎地域における助産ケアへの注目度の低さがうかがえる。また、医療過疎地域における助産ケアに関する文献は2008年からみとめている。その背景には2006年以降、産科医不足により急速に分娩施設数が減少したこと<sup>58)</sup>を受けて、医師不足を解消する手段として院内助産や助産師外来への必要性の高まりがあったのではないかと考える。

看護・助産ケアの内容から抽出されたカテゴリーをみると「関係機関との連携」は、どの職種にもみられることから、関係機関との連携をはかることは、医療過疎地域に求められる看護職全般に求められる共通した役割であることが明らかである。

一方、助産師の助産ケアのみにみられたカテゴリーとして「専門技術者としての存在」「密接な人間関係」がある。助産師は、保健師助産師看護師法により「助産または妊婦・褥婦もしくは新生児の保健指導を行う女子」と定められ、看護職において唯一、助産を扱うことができる専門職である。正常分娩に限っては医師の介入なしに介助を許されている。助産師の助産

ケアのみに「専門技術者としての存在」がみられたということは、医療過疎地域の助産師には専門性が求められていることである。さらに専門技術を提供するためには、専門的判断が不可欠である。今田ら<sup>17)</sup>は、医療過疎地域の病院において、褥婦の視点から良質なケアの構成概念について検討し、妊産褥婦は良質なケアとして、「助産師としての専門的判断やケアの提供」を明らかにしている。また、日本看護協会が作成した「医療機関における助産ケアの質評価－自己点検のための評価基準－」<sup>13)</sup>、の評価内容にも妊産褥婦・新生児の診断とケアに関する項目があることから「専門技術」に加えて「専門的判断とケア」も医療過疎地域の助産ケアに不可欠であると考ええる。くわえて医療過疎地域において助産師の専門性が求められるのは、医療過疎地域の産科医療の特殊性にあると考える。産科医不足に伴い院内助産や助産外来の必要性が叫ばれ、厚生労働省も対策を講じているが、首都圏に比べ医療過疎地域の院内助産や助産師外来開設数の増加は極端に乏しい<sup>5)</sup>。分娩は正常な経過においても予測のつかないリスクと共存しているため、緊急的な処置を必要とし、特に分娩時の出血、胎児心拍の低下など分娩前後に突然発症する産科救急は一刻を争い、時間が勝負となる。首都圏においては緊急事態が生じた際に高次機能病院への搬送は容易である。しかし、医療過疎地域では、周産期センターが集約化されたことも相まって、アクセスの悪さから搬送は容易ではない。搬送が容易ではないが故、予測をもった判断が重要となる。つまり医療過疎地域が助産師の専門性を求めるのは、首都圏の分娩施設の助産師よりさらに予測性を持った専門的判断が必要とされていることが原因ではないかと考える。

「人間関係」は、看護師と助産師両方にみられた

が、看護師は「良い人間関係」であるのに対し、助産師は「密接な人間関係」であった。この違いについては、医療疎地域という特殊性から妊産褥婦と助産師との関係は、生活域を共にしており、首都圏などの他の地域よりも関係性が近くなることが推測される。そのため、助産師はより密接な人間関係を求められていると考える。

以上のことから医療過疎地域は、助産師の助産ケアとして「専門技術者としての存在」「密接な人間関係」を求めていることが推測された。しかし、どのような専門技術が求められているのか、またその専門技術を提供するために必要な専門的判断・ケアは何かといった助産師の実践能力は明らかになっていない。さらに助産ケアは医療過疎地域の施設機能・組織によって異なることと予測されるが、その点も明らかではないため今後の研究が期待される。

## V. 結 語

今後の課題としては、医療施設の機能・組織および医療過疎など地域の特性に応じた役割や実践能力についての研究が望まれる。

## 【文 献】

- 1) 日本産婦人科学会：声明「周産期医療体制の危機的状況を打開するために」，2007.
- 2) 小原剛，他：地域医療連携機能分担システムは地域産科医療危機を救うことができるか？病院間の垣根を越えた連携システムの構築，日本産婦人科学会誌，62(2)，653，2010.
- 3) 海野信也：産科の現状，BIO Clinica，25(1)，84-89，2010.
- 4) 財団法人母子衛生研究会編：母子保健の主なる統計2009，128-129.
- 5) 平成22年度三重県助産師養成確保に関する懇談会資料より抜粋.
- 6) 遠藤俊子：助産師外来・院内産の現状と今後への課題，看護管理，18(9)，756-761，2008.
- 7) 上野恭子：院内助産システムによる安全なお産環境の提供，看護，61(9)，81-84，2008.
- 8) 社団法人日本看護協会：新人看護職員研修ガイドライン，2010/09/01，<http://www.nurse.or.jp/home/kisokyouiku/pdf/gaidline.pdf>
- 9) 平澤美恵子，他：日本助産学会業務・教育委員会報告「施設が妊産婦に示すケア(サービス)内容」No.1 妊娠期(その1)，ペリネイタルケア2002，21(9)，73-79，2002.
- 10) 平澤美恵子，他：日本助産学会業務・教育委員会報告「施設が妊産婦に示すケア(サービス)内容」No.2妊娠期(その2)，ペリネイタルケア2002，21(10)，76-79，2002.
- 11) 平澤美恵子，他：日本助産学会業務・教育委員会報告「施設が妊産婦に示すケア(サービス)内容」No.3分娩期，ペリネイタルケア2002，21(11)，92-95，2002.
- 12) 平澤美恵子，他：日本助産学会業務・教育委員会報告「施設が妊産婦に示すケア(サービス)内容」No.4産褥期，ペリネイタルケア2002，21(12)，82-86，2002.
- 13) 日本看護協会助産師職能委員会：医療機関における助産ケアの評価－自己点検のための評価基準－，2003.
- 14) 小西清美：初学者である助産学生の正面介助法分娩介助技術における作業姿勢および精神負担の検討 熟練助産師との比較，人間工学，42(4)，251-258，2006.
- 15) 中川有加：会陰保護術における助産師の手掌にかかる圧力，日本助産学会誌，22(1)，49-64，2008.
- 16) 今田葉子，他：沐浴時における熟練助産師の児頭固定と手の接触圧に関する研究，産業保健人間工学研究，9(1)，23-28，2008.
- 17) 今田葉子，他：医療過疎地域の病院で出産した褥婦の視点からみた周産期における良質なケアの構成概念について，三重県立看護大学紀要，11，59-71，2007.
- 18) 村本淳子，他：エスノメソドロジー的相互行為分析を用いた施設助産師のケアモデル作成に関する研究，平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書，2009.
- 19) 黒田裕子，西岡啓子，加藤優子，他：へき地で乳児を育てる母親の育児支援，日本ルーラルナーシング，5，95-104，2010.

- 20) 吉留厚子：戦時中・戦後の加計呂麻島における自宅出産体験および伝統的「とりあげ婆さん」日本農村医学会雑誌, 59(1), 29-34, 2010.
- 21) 灘久代：産婦人科医の存続問題で揺れ動いた離島 壱岐病院の経緯と取り組み, 助産雑誌, 64(6), 522-527, 2010.
- 22) 杉山智春, 上山直美, 岸川亜矢：昭和20年代におけるA島での開業助産師の妊産婦へのかかわり, 関西看護医療大学紀要, 2(1), 25-31, 2010.
- 23) 伊藤由美, 木村瑞恵：遠隔地在住妊婦の分娩に対する不安, 看護総合科学研究会誌, 1(1), 25-31, 2009.
- 24) 小原 剛, 小笠原敏浩, 村井眞也, 他：産婦人科医療過疎地域の岩手県で産婦人科施設集約化は有効か？岩手県立病院医学会雑誌, 48(2), 87-93, 2008.
- 25) 今田葉子, 永見桂子, 大平肇子, 他：医療過疎地域の病院で出産した褥婦の視点からみた周産期における良質なケアの概念, 三重県立看護大学紀要, 11, 59-71, 2008.
- 26) 大平肇子, 今田葉子, 永見桂子, 他：保健師の視点からみた医療過疎地域における母子ケアのための保健師と助産師の連携, 三重県立看護大学紀要, 11, 9-19, 2008.
- 27) 大平肇子, 小林文子, 吉岡多美子, 他：日本におけるルーラルナーシングの役割モデルについての研究, 三重県立看護大学紀要, 6, 75-84, 2002.
- 28) 糸数仁美, 大湾明美, 佐久川政吉, 他：沖縄の離島ヘリコプターによる救急搬送における看護師の役割, 日本ルーラルナーシング学会誌, 5, 57-66, 2010.
- 29) 塩ノ谷朱美, 工藤奈織美, 鈴木久美子：集落が散在している山間へき地における介護予防のための市町村保健師か活動に関する研究, 日本ルーラルナーシング学会誌, 5, 17-30, 2010.
- 30) 梅山晴美, 宮本サチ子：離島へ退院する患者調整を行って, 日本精神看護学会誌, 52(1), 38-39, 2009.
- 31) 安田貴恵子, 御子柴裕子, 小林理恵子, 他：山間地域の診療助所における看護師の役割, 長野県立看護大学紀要, 10, 89-100, 2008.
- 32) 晋照早苗, 田内香織, 森仁 実, 他：過疎地域における訪問看護師の役割に関する検討, 岐阜県立看護大学紀要, 10(1), 13-21, 2009.
- 33) 春山早苗, 篠澤侃子, 鈴木久美子, 他：へき地における災害対策体制づくりにかかわる看護職の活動方法に関する研究, 自治医科大学看護学ジャーナル, 5, 39-45, 2008.
- 34) 中尾八重子：訪問看護ステーションのない離島における高齢者の療養場所移行の特徴と看護職の役割, 日本ルーラルナーシング学会誌, 3, 49-59, 2008.
- 35) 佐久川政吉, 大湾明美：地域ケアシステム構築における専門職者の役割の検証, 日本ルーラルナーシング学会誌, 2, 27-36, 2007.
- 36) 北山昭雄：へき地での保健・医療活動における看護職の役割を考える, 日本ルーラルナーシング学会, 2, 15-21, 2007.
- 37) 晋照早苗, 田内香織, 藤沢まこと：病院から診療所へ体制移行する過疎地域医療機関における看護援助のありかた, 岐阜県立看護大学紀要, 9(1), 45-51, 2008.
- 38) 菊池友美：島嶼住民の求める離島看護職の役割, 看護教育, 49(8), 705-708, 2008.
- 39) 成田伸, 大原良子, 岡本美香, 他：へき地における成人期にある人々, 女性, 子供の健康ニーズ, 自治医科大学看護学部紀要, 4, 123, 2007.
- 40) 村嶋幸代, 田口敦子, 永田智子：ルーラル・リモートエリアにおける訪問看護とそれを支える条件, 保健の科学, 48(9), 680-683, 2006.
- 41) 松浦智和, 西基, 三宅浩次：島嶼地域高齢者の主観的健康観とその関連要因, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 2(1), 45-53, 2006.
- 42) 春山早苗, 鈴木久美子, 佐藤幸子, 他：へき地の健康危機管理体制づくりにおける保健所保健師の機能・役割, 自治医科大学看護学部紀要, 3, 3-17, 2005.
- 43) 新井信之, 渡部幹夫, 渡邊喜代子, 他：離島の精神科障害患者の支援状況, 順天堂医, 52(1), 103-110, 2006.
- 44) 新井信之, 渡部幹夫, 渡邊喜代子, 他：離島に勤務する保健師による活動の方向性, 順天堂大学医療看護研究, 2(1), 95-101, 2006.
- 45) 吉岡多美子, 小林文子, 大平肇子, 他：ルーラル

- ナーシングにおける専門家役割モデルの検証, 三重県立看護大学紀要, 6, 85-94, 2002.
- 46) 佐久川政吉, 大湾明美, 大川嶺子, 他: 沖縄離島のモデル地域における地域ケアシステム構築に関するアクションリサーチ, 沖縄県立看護大学紀要, 6, 58-63, 2005.
- 47) 荒木美幸, 大石和代, 岸英子, 他: 小離島における母子相談の内容-5年間の推移について-, 長崎大学医療技術短期大学部紀要, 12, 77-81, 1999.
- 48) 松村尊磨, 間瀬教史, 鈴木順一, 他: 集落の機能が低下した農村地域高齢者の抑うつおよび将来不安要因とケア・ニーズ, 甲南女子大学研究紀要, 3, 51-58, 2009.
- 49) 北山昭雄: 里山における遠隔看護システムの活用に関する検討, 日本遠隔医療学会, 4(2), 309-310, 2008.
- 50) 盛田寛明, 鈴木久美子: 自治医科大学看護学部紀要, 2, 5-16, 2004.
- 51) 川崎道子: 離島住民の生活習慣と主観的健康観との関連, 沖縄県立看護大学紀要, 4, 94-100, 2003.
- 52) 大湾明美: 離島における施設入所高齢者の生きがいづくりに関する研究「ふるさと訪問」事業化への取り組みのプロセスと事業評価・課題, 沖縄県立看護大学紀要, 4, 37-47, 2003.
- 53) 矢島まさえ, 小林亜由美, 大野絢子, 他: 人口過疎地域における精神障害者の社会復帰支援体制の課題, 群馬パース学園短期大学, 5(2), 303-310, 2003.
- 54) 足立敬子, 梅藤薫, 犬賀辰子: 厚生の指標, 50(8), 30-37, 2003.
- 55) 吉浦直美, 西原リエ, 酒井枝津子: 離島に住む未熟児の両親への定期的通信便など援助手段の導入  
良好な母子関係の成立をめざして, 臨床看護研究の進歩, 5, 113-119, 2003.
- 56) 大平肇子, 小林文子, 吉岡多美子, 他: 日本におけるルナーシングの役割モデルについての研究, 三重県立看護大学紀要, 6, 75-84, 2002.
- 57) 奥野正孝, 小林文子, 吉岡多美子, 他: Rural Nursingを提唱する, 地域医療, 第44回特集, 163-164, 2005.
- 58) 分娩取りやめ, 105病院 本社全国調査, 朝日新聞, 2007年3月25日付掲載.